「そのころ」

作・大迫旭洋

登場人物……男

（男が現れ、手短に挨拶する。そのまま、物語が始まる。）

知り合いに、コンビニで働いてる山下くん、って人がいるんですけど、その人から、このお話を始めてみたいと思います。

夜中。それは、山下くんが、品出しをしているときだった。テレテレテレ、と軽快な電子音が鳴って、半ば条件反射のように「いらっしゃいませー」という声がこぼれた。パンを並べながら、チラ、とそちらの方を向いたとき。この世界から一瞬、音が消えた。未だ味わったことのない感覚がその心臓を貫いて、山下くんは口をぱくぱくさせることしか出来なかった。言いようもない幸福感が山下くんを襲う。心は渦を巻いて、空中へと浮かんでゆく。

つまりは、恋。その女の人に、山下くんは、初めての恋をした。

そのころ。

隣町にある花火工場で、とある職人が働いていた。ゴリゴリと、火薬が削れる音がする。職人は思っていた。これが最後の仕事になるかも知れない。

不景気という波によって、仕事は安いところへ移っていく。最近の花火大会は、何万発という数字を競い合ってばかり。それでも職人は、少年のころに見た花火を覚えている。夜空に咲く七色の光は、そのまま少年の瞳の輝きになった。それにかける人生になった。

知り合いがやっている夏祭り。花火の数は二千五百発。一つ一つに心をこめて、職人は作り続ける。その一瞬が、永遠になることを信じて。

そのころ。

「あ、ありがとうございましたー」と山下くんはおじぎをした。買い物を終えたその人が、ゆっくりと離れてゆく。その背中を見ながら、山下くんは思った。て、てててて、天使。あまりに恥ずかしい言葉だけれど、山下くんは本当に、そう思った。天使はまるでモーゼのように、自動ドアを真っ二つに割って、出てゆく。山下くんは、一人立ち尽くすことしか出来ない。コンビニの店内放送が、そこにはただ響いていた。

そのころ。

天使は、コンビニの駐車場にいた。その前に車が止まり、ドアが開く。「お疲れさまです」と挨拶すると、「ういーす」と男の人が返事した。黒い車がのっそり、動き出す。

「また、リピーターさんみたいよー」「そうなんですかあ？」

「ナツミちゃん人気あるから、頼もしいよ、はは」

彼女は、このお店ではナツミという名前だった。不思議なことに、名前が違うだけで、その役割を切り離すことが出来る。窓ガラスに映るナツミと一瞬、目が合った。

今日もはじまるなあ。

ホテルの前で、車が止まった。「行ってらっしゃい」という声に、ナツミは笑って「ありがとうございます」と返事をした。

そのころ。

山下くんは鏡を見ていた。散らかった眉毛、腫れぼったい唇。どうして僕はこんな顔なんだろう。眺めていたら、なんか自分が自分を見ているようで、山下トモキが山下トモキを見ているようで、気持ち悪くなってしまった。山下は山下でも、山ピーくらいイケメンだったら、もっと人生楽しかっただろうに。思わず、ため息がこぼれた。

そのころ。

とあるアパートでは、おばさんがアルバムをぱらぱらとめくっていた。旦那さんの性格なのか、写真の角はアルバムの角にきっちりと合わせてあって、おまけに手書きの文字で「２００３年・釜山にて」なんてメモまである。おばさんは、ずるいなあ、と思った。

ここまできっちりした思い出を、どうして置いて行くんだろう。段ボールの山に囲まれながら、おばさんは今日サインした離婚届のことを思い出していた。

そのころ。

山下くんは、その眉毛を整えるために、眉毛カッターを買うことにした。

そのころ。

カーラジオを聞きながら、ドライバーは待っていた。雨がぱらぱらと降りはじめる。そろそろかな、と思うと、携帯が震え、ナツミちゃんというトーク画面には「終わりました」と、かわいいウサギさんが笑っていた。

タバコの火を消して、車のエンジンをかける。ワイパーの音を聞きながら、その人は、ぼんやりと思った。生きるのってこんなに難しかったかなあ。

そのころ。

眼鏡をかけた女の人は、せっせと絵を描いていた。ヒヨコがその羽根を広げて、「なんでやねん」とツッコんでいる絵。前回の「かわいいウサギさん」というラインスタンプが、そこそこ売れてお金にもなったので、その第二弾だった。このスタンプを、私の友達が、私の知らないどこかの誰かが、使ってくれる。私が生み出したこの絵のおかげで、世界に新しいコミュニケーションが生まれている。それはお金よりも、もっと価値があることのように思えた。

もっともっと一人歩きしてちょうだい、私の子どもたち。そんなことを思いながら、彼女は書き続けた。眼鏡の奥にある瞳が、ぬらりと光った。

そのころ。
アイスランドでは、マーフィーさんが日光を浴びていた。真っ白い雪原の中、ホームセンターで買ったベンチの上に寝そべるマーフィーさん。サングラスに、赤いパンツという出で立ち。肌をやわらかい日光が包む。その気持ち良さに、思わず、鼻歌が出てしまう。
すると、急に、お腹あたりに冷たさが走った。見ると、子どもが雪の玉を作って、こちらに向かって投げつけてくる。マーフィーさんはこう叫んだ。
「seo bastraid-」

そのころ。
ホテルの一室で、ナツミちゃんは仕事をしていた。その相手は、五十歳くらいのおじさんだった。一通りの物事が終わったあと、おじさんは「ごめん」と言った。
そして、「頭をなでてくれないか」というお願いをした。ナツミちゃんは「いいですよー」と、その頭を撫でた。生きてきた分だけ薄くなった頭を撫でると、おじさんは突然泣き出してしまった。そして「寂しい寂しい寂しい」とひたすら繰り返した。ナツミちゃんは、ふと、おじさんの言葉を思い出した。
この前離婚したんだ、ってそういえば言ってたなあ。おじさんの頭をよしよしと撫でながら、ナツミちゃんは、私もがんばろう、と思うのだった。

そのころ。
地面から栄養を吸い取って、その薔薇は少しだけ大きくなった。

そのころ。
街をぶらぶらと、一人の男が歩いていた。目の前で、若いカップルがいちゃついている。男にはそれが、我慢出来なかった。俺が今、こんな状態なのに、こんなに苦しい思いをしているのに、それとは無関係に、幸せそうにしているヤツがいる。それが、どうしても、我慢出来ないのだった。
男は「おい」と、カップルの男にいちゃもんをつけ、その襟首をぐっと掴んだ。

そのころ。
山下くんは財布を拾った。道の真ん中に、濃い緑色の財布が落ちていた。慎重な山下くんは、周りに誰もいないことを確認してから、そっとそれを拾いあげた。そして、これは落とし物ですよ、とアピールしながら交番まで歩いた。
警官が「わざわざありがとうございます」と、財布を受け取って、書類を差し出した。山下くんがボールペンでそれに記入しているとき、「すみません、財布届いてませんか？」と女の人が入って来た。山下くんは驚いた。彼女が、天使だったから。

そのころ。
自宅にて、小説家が悩んでいた。止めておいたほうがいい、と分かっていながら、ついついネットの書評を読んでしまう。
「ご都合主義、リアリティなし」「世界の仕組みをもっと勉強すべき」「星二つ」「ありがとう！」「ヤギの良い餌になりました！」
思わず声が漏れた。ふへへへへ。横になると、天井の木目が目に入る。小説家は思った。才能ないのかなあ、いよいよ、本格的に。
小説家はうなだれ、気を紛らわすために、ラジオの電源を入れた。

そのころ。
ラジオＤＪは、いつも通りトークをしていた。向かいにはアシスタントがいる。お互い三十代のときにこの番組を任されてから、早二十年。お互いすっかり、おじさんとおばさんになってしまった。
先日、会議があり、この番組の打ち切りが決まった。このことはまだ、リスナーには知らせていない。知らせたら、どんなお便りが届くんだろう。最終回は、どんな放送になるんだろう。そんなことを考えながらも、番組は順調に進んでいた。

そのころ。
一つの精子が卵子に到着して、細胞分裂が始まった。

そのころ。
山下くんは、天使とお茶をしていた。椅子がハンモックみたいになっていて、どうも落ちつかない。ゆらゆら揺れながら、山下くんはコーヒーに手を伸ばす。
「何か、お礼をさせてください」彼女はそう言った。「いや、いやいやいや」としか言えなかったが、あれよあれよとこんな状況になっていた。
どうやら天使は、コンビニで顔を合わせていることに、気づいていない。それは少しショックだった。でも、そんなもんか、とも思った。山下くんは勇気を出して、名前を聞くことにした。その唇から、「ナツミ」という言葉がこぼれた。

そのころ。
彼女は自分でも、少しびっくりしていた。息をするように、嘘が出てきたから。いつの間にか、自分の本名よりこの名前を使うことが増えた。もしかしたら、私は今も仕事中なんだろうか。それってすごく失礼だよなあ。
「一つ、お願いがあるんですが」と、目の前の人は言った。「実は、僕の父が、花火職人をやっていて」という前置きがあってから、
「その花火を、一緒に、観に行きませんか？」

という言葉が、耳の中に入ってきた。その人は、ずっと下を見ていたので、目が合うことはなかった。

そのころ。

職人のいる倉庫には、二千五百発の花火玉が、所狭しと並んでいた。昔から、この光景を見るたび、言いようもなく昂ぶってしまう。町を巻きこんだ、一年に一度きりの、大きなイタズラ。職人は、これが次々と夜空に炸裂する姿を思い浮かべた。

そのころ。

警察署から、一人の男が出てきた。カップルの男にいちゃもんをつけ、喧嘩をふっかけた男。着ているシャツは、所々赤く染まっている。「もう来るなよ」というお決まりの言葉にコクンと頷きはしたが、お前に何が分かるんだ、と思った。

つい、その名前を検索してしまう。彼女のブログ。半年前で更新は止まっている。彼女の時間は、そのとき止まってしまった。思い出の中で、彼女はいつも笑っている。ずっと続くと思っていた。無条件に信じていた。もう、彼女はいない。一台の自動車が、その命を奪っていった。道を走る車が、全て、敵に思える。

そのころ。

ある工場では、定期的に機械音が鳴り響き、たくさんの薬がパッケージされていた。

そのころ。

山下くんは、服を選んでいた。目前に迫った花火大会。ナツミさんと二人で行く花火大会。きっと、人生でたった一度の機会。折角なら、思いきり背伸びしたい。イオンモールで、ショップ店員の力を思いきり借りながら、山下くんは大いに悩んでいた。

そのころ。

イオンモールの特設ステージで、ピエロがショーをしていた。風船が、きゅっきゅと音を立て、あっと言う間に形を変える。子どもが目を丸くして、その手元を眺めている。

犬やピストルが完成するたびに、「わー！」と歓声があがる。だから今日も頑張っちゃうんだよなあ。カツラの締め付けを感じながらも、ピエロはそう思った。

そのころ。

アフリカのガーナで、野生のカバが大きなあくびをした。その口の中に、たくさんの雨が入ってゆく。カバは身体をぶるぶると震わせ、また歩き出した。

その様子を、アブドゥルさんは見ていた。雨季によって、もうずいぶん太陽の姿を見ていない。作物も駄目になってしまう。アブドゥルさんは呟いた。

「shit……」

そのころ。
吉田さんは困っていた。吉田さんは、人から自分に向けられる好意が、あまり得意ではなかった。それはほとんどが一時的なものだし、何故かしら申し訳ない気持ちになってしまう。いつか離れてしまう興味なら、最初から持たないでほしい。
ラインにメッセージが届いた。「明日は、よろしくお願いします！」それに、「よろしくお願いします」と返して、かわいいウサギさんのスタンプをひとつ押した。
車が止まって、「ナツミちゃん、着いたよ」と声をかけられた。彼女は「はーい」と、返事をした。

そのころ。
眼鏡をかけた女の人は、新しいラインスタンプが承認されるのを待っていた。

そのころ。
花屋の店先には、薔薇が並んでいた。

そのころ。
小説家は天井の木目を数えながら、「何かいけそうな気がする」と呟いた。

そのころ。
二千五百発の花火玉が、お祭り会場に到着した。

そのころ。
ラジオ番組のリスナーは、感謝の気持ちを込めて、お便りを書いていた。

そのころ。
待ち合わせ場所で、山下くんと吉田さんが出会った。山下くんは、浴衣の彼女にときめきながら、「ありがとうございます」と頭を下げた。彼女は、「いえいえ、こちらこそ」と笑った。二人は、並んで歩き始めた。

そのころ。
恋人を失って、傷ついた男もそこを歩いていた。お祭りの賑わいが、自分を笑っているんじゃないかと思ったし、それらが全て偽物のようにも思えた。
子どものころからあるそのお祭りは、何も変わっていないはずなのに。

そのころ。
たこやき屋の主人が、「いらっしゃい！」と声を上げた。

そのころ。
山下くんは、初めて袖を通すシャツに若干の違和感を感じつつも、その幸せを噛みしめていた。隣にナツミさんがいる。夢みたいで、まだどこか信じられない。きっとこんな日は、これからの人生で、もう二度とない。その事実に、ものすごく感謝しながら、どこか寂しくなってしまう自分がいた。

そのころ。
吉田さんは、後悔していた。罪悪感に苛まれていた。目の前の人は、見たらすぐ分かるくらい幸せそうで、その分だけ、申し訳なさを感じてしまう。せめて、本当の名前を言っておけば良かったなあ、と思った。

そのころ。
一人の子どもが、そんな二人の間を通り過ぎていった。

そのころ。
ラジオＤＪは、マイクに向かって喋りかけていた。
「えー、本当に、たくさんのお便りありがとうございます。最終回、になって改めて、自分にとってこの番組がどんなに大事だったか、思い知ります。
みなさん、いつも聞いてくれて、本当にありがとう。
それでは、最後の曲です。ラジオネーム・ケンちゃんパパさんからのリクエスト
ブンブンサテライツ／レイ・ユア・ハンズオンミー」

そのころ。
山下くんは、「あの」という声を出した。彼女が立ち止まる。
傷ついた男が、そのすぐ近くを歩いている。
山下くんは、隠しておいたプレゼントを取りに行った。それは、花束だった。

そのころ。
花火職人は、最終確認を終えて、時計を見ていた。その合図で、導火線に火がついた。しゅるしゅると音を立てて、それが短くなってゆく。
山下くんは、花束を差し出し、「好きです」という言葉をひねりだした。
花火が空に向かって飛んでいき、音を立てて、その花が開く。

臆病な山下くんは、そのまま、心をさらけ出した。
好きです。どうしようもなく、好きです。
あなたと出会ったときから、僕の世界は変わりました。
花火が、次々と打ちあがる。
職人は満足気に、その様子を見ている。
新しいラインスタンプが承認された。
眼鏡をかけた女の人が喜んでいる。
自分の中に、こんな感情があるなんて思わなかった。
おばさんの携帯電話にメールが届いた。
「元気してるか？」というメールだった。
思わず、少し笑ってしまう。
車が左折する。
小説家は、休まずに言葉を書き続ける。
昨日まで存在しなかった物語が生まれてゆく。
僕は、あなたのことを、何も知らない。
たこ焼きが一つ売れた。
だから、あなたのことを、もっと知りたい。
街のアーケードに、歌声が響く。
降っていた雨が止んで、大きな虹が出る。
それは、別れた恋人についての歌だった。
お願いします。
また一つ、花火が上がる。
アイスランドに、太陽が昇る。
これからも、一緒にいてください。
子どもが笑っている。
病院で、一つの命が終わる。
吉田さんは困ってしまった。
子どもの靴が、ピカッと光る。
目の前で、花束が揺れる。
だって私は、何も教えていない。
薬が出荷される。
それがないと、眠れない人がいる。
私は、立派な人間じゃない。
ラジオＤＪは、時計を見る。
やってくる終わりが、初めて愛しく思えた。
なのに、どうして。

一際、大きな花火があがる。
拍手が起きる。
どうしてこの人は、こんなに真っすぐなんだろう。
ピエロが、そのメイクを落としている。
大根が土の中で大きくなる。
私は、何も言えなかった。
傷ついた男は、その様子を見ていた。
カバが、大きく口を開ける。
ふざけるな、と思った。
アナウンサーが、今日のニュースを読み上げる。
進んでゆく。
ラジオは放送をやめない。
彼女がいなくても、世界は進んでゆく。
シャッターの音が響く。
おばさんは、「元気だよ」とメールした。
それが、悔しくてたまらない。
警官は日誌を書いている。
イチゴ味のかき氷が、口の中で溶けた。
本当は分かってる。
お母さんのお腹を、赤ちゃんが蹴った。
だけど、認めたくない。
今、ナツミさんは、どんな顔をしているんだろう。
どうしたらいいか、分からないけど。
ありがとう、と伝えたい。
出来ることが、あるとすれば。
息を吐く。
言葉が生まれる。
ねえ。
ぱらぱらと花火が降ってくる。
男は、歩き始める。
僕の手から、花束が消えた。
それを、確かに受け取った。
顔をあげる。
笑っていた。
それが、全てだった。
全てが、同時にやってくる。

そのころ。

コンビニで。花火工場で。仕事場で。駐車場で。車の中で。一人暮らしのアパートで。アイスランドで。鏡の中で。ラブホテルで。カフェで。ネットの世界で。自宅で。トイレの中で。遊園地で。水族館で。街中で。アフリカで。交番で。ゲームセンターで。和室で。洋室で。畳の上で。アーケードで。山で。海で。ふるさとで。道路で。放送局で。イオンモールで。花屋で。思い出の中で。アスファルトの上で。夏祭りで。山下くんが。おばさんが。花火職人が。ドライバーが。男が。小説家が。カバが。お父さんが。子どもが。マーフィーさんが。精子が。警官が。友達が。アブドゥルさんが。女が。花束が。たこ焼きが。赤ちゃんが。吉田さんが。私が。彼が。彼女が。あなたが。歩いている。働いている。休んでいる。遊んでいる。泣いている。座っている。憧れている。諦めている。揺れている。楽しんでいる。悩んでいる。書いている。起きている。眠っている。苦しんでいる。食べている。考えている。見ている。聞いている。笑っている。生きている。愛している。愛している。今も、馬鹿みたいに、俺は。

（暗転。再び明かりがついたとき
そこにはただ、花束があるばかり。）